令和4年度第2回 総合教育会議

日時 令和5年3月22日（水） 午後3時00分～午後3時57分
場所 千代田区役所 6階 特別会議室

議事日程

区長挨拶

第 1 協議・調整事項

(1) 大綱の改定について

第 2 その他

出席委員（6名）

区長	樋口 高顕
教育長	堀米 孝尚
教育長職務代理者	金丸 精孝
教育委員	佐藤 祐子
教育委員	長崎 夢地
教育委員	俣野 幸昭

出席職員（9名）

子ども部長	亀割 岳彦
教育担当部長	佐藤 尚久
子ども総務課長	大谷 由佳
教育政策担当課長	原水 珠代
指導課長	山本 真
政策経営部長	古田 毅
企画課長	夏目 久義
文化スポーツ担当部長	恩田 浩行
文化振興課長	加藤 伸昭

書記（2名）

子ども総務係長	江口 友規
子ども総務主査	高橋 祐樹

区 長 | 開会に先立ちまして、傍聴者から傍聴申請が今後あった場合は、傍聴を許可することといたしますので、ご了承ください。
| ただいまから令和4年度第2回総合教育会議を開会いたします。本日は、教育長及び教育委員全員のご出席を賜っております。ありがとうございます。
| す。会議開催の要件を満たしていることを併せてご報告申し上げます。

また、今回の署名委員は、佐藤教育委員にお願いいたします。

佐藤委員 はい。承知しました。

区長 本日は、前回に引き続きまして、大綱の改定を主な議題とさせていただきます。

子ども総務課長 それでは、事務局から、協議事項説明のために、本日出席している職員の紹介をお願いします。

子ども総務課長 はい。子ども総務課長です。

子ども総務課長 本日出席しております職員は、政策経営部長、企画課長、文化スポーツ担当部長、文化振興課長、子ども部長、教育担当部長、教育政策担当課長、指導課長、そして私、子ども総務課長です。

区長 以上の出席状況でございます。

区長 はい。ありがとうございます。

区長 それでは、日程第1、協議・調整事項に入ります。（仮称）千代田区教育と文化に関する大綱（案）につきまして、教育政策担当課長、説明をお願いします。

教育政策担当課長 はい。それでは、大綱（案）についてご説明をさせていただきます。

教育政策担当課長 まず、前文のですが、第1段落目に社会状況の変化について記載をさせていただいております。また、2段落目には、今日的課題に対応するために、身につけてもらいたい力や求められている行動を記載しております。3段落目では、千代田区の特色ですとか、今回、教育と文化に関する大綱という形で、文化を入れていくので、文化の重要性について記載をしているところです。

教育政策担当課長 これらの内容を参考に、区の方針といたしまして、教育と文化について、それぞれ1項目ずつ示しているところです。

教育政策担当課長 方針1の教育に関するところでは、こども基本法の施行もあることから、子どもの権利推進、誰一人取り残さないウェルビーイングの視点などを記載するとともに、共育の理念についても継承しているところです。また、区の特色である0歳から18歳までを見通した子育て、教育を継続していくこと、障害のあるお子さんや特別な支援が必要なお子さん、そうしたお子さんがいらっしゃる家庭への支援についても充実させていくことを記載しております。

教育政策担当課長 また、方針2の文化に関するところでは、グローバル化の進展に伴いまして、より一層多様性と包摂性が重視されていることから、自己認識の起点となる文化に関する理解促進が必要なこと、また、生涯にわたって学び、触れ合う中で、生きる喜びを感じ、豊かな人間性や感性を涵養していただきたいということを記載しているところです。

区長 説明は、簡単ですが、以上です。

区長 はい。ありがとうございました。

区長 それでは、この件について意見交換をさせていただきたいと思っておりますので、ご自由にご発言をお願いいたします。

金丸委員
区長
金丸委員

よろしいでしょうか。

はい。金丸委員、お願いします。

当初私が頂いたものと文案が少し変わっているのですが、私のイメージとして、第1段落、第2段落、第3段落、これは大綱をつくるための前提条件というか、前提の状況をこういうふう把握していますよという文書なわけですね。そして第4段落が本来は大綱になるのだらうと思います。

実際にこの大綱をつくる法律の規定としては、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の3第1項が根拠になっており、どのように書いてあるかという、地方公共団体の長は、教育基本法第17条第1項に規定する基本的な方針を参酌し、その地域の実情に応じ、当該地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱を定めるものとする、こういうふうになっているわけです。ですから、ここには大綱が定められなければいけないというふう考えているのですけれども、このまんま見ると、要するに、ここに書いてあるのは、2つの方針を定めていることは確かなようですけれども、一体、方針と大綱って一緒なのだろうか。要するに大綱を定めろと書いてあるのに、大綱を定めないで方針を定めるだけで本当にいいのだろうかという疑問がございます。

その疑問について皆さんのご意見をお伺いしたいというふうに思っています。

区長

はい。分かりました。ありがとうございます。

今、資料で改めてお手元にお出ししていたと思うのですが、確かに言葉が、大綱だとかビジョンがあったり計画があって方針があると、分かりづらい部分があったかと思しますので、改めて私どもの取りまとめた考えを既にお出ししている資料かと思しますが、お伝えしますと、現状はこうであったものが、今後はこの改定案のとおり、このようにさせていただくといったところであります。

ここの改定案のところ、資料を見ていただくと、大綱というものが、まさに今ご指摘いただいたような取組方針でありますし、また、区としてのこの普遍的な考えを示すものだという考えの下、今回整理させていただいたものです。

今、具体的にご指摘いただいたのが、この大綱というものがあるのかないのか、むしろこれは時代背景や地域の実情を参酌しと、あるいは教育基本法第17条第1項の下でのこの基本的な方針を参酌したものが、この1段落目、2段落目、3段落目になると思っています。

で、4段落目がこういう方針で、さらに1と2と、こういうふうにあるかと思うのですが、私どもの考えの整理としましては、前文、まさに今の前提の3つの段落部分と、この4段落、あと1、2の部分、全てが大綱になるというふう考えています。この前文と方針を含めたものが大綱だというように考えているところです。

ご指摘の部分はあるんですが、通知文が文部科学省から出ておりまして、

地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正が行われた際に、大綱の定義というのは、地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策について、その目標や施策の根本となる方針を定めるものだ。つまり通知文上は、大綱の定義は根本となる方針を定めるものですよというのが文部科学省から出ているものです。そこでは、大綱では、まあ、大綱イコール根本となる方針を定めると言っているのですが、そこでは詳細な施策までは策定するものは求めていませんということが明らかになっています。

お手元の紙でもお示ししたとおり、やはり今おっしゃったような時代背景やこうした情勢の変化によって、普遍的な考えを示すものだということでもあります。そうした中で、改定案では、施策展開の根本的な方針ということで、1項目ずつこのように書かせていただいたところでもあります。

今後は、この大綱を制定させていただいた後は、具体的な施策は教育委員会の下で策定する、展開していく。ビジョンというふうに書かれていますけれども、こちらでさらに教育委員会のほうで整理していくと私は聞いているところです。

分かりづらかったかと思うのですが、私どもの考えの整理としては、今ご説明したところになります。

金丸委員長

ありがとうございます。

ほかはいかがでしょう。

どうぞ。

長崎委員

ずっとこの大綱の案を長くにわたって考えてきていて、私からすると、すごく読みやすく、すっきりして、要点だけがまとめられて、読みやすい文章になったかなと思っています。

1番目に人口の減少・少子高齢化の進行というところが、日本国全体的にはそうかもしれないけど、ここ千代田区において当てはまるのかなというのがちょっとあって、もちろんこれを記すのはいいと思うのですが、千代田区においてはこういう状況でというのがあったほうが、より区の大綱としてはいいのかなと思いました。

以上です。

区長

はい。ありがとうございます。

確かにご指摘のように、我が国としては人口減少・少子高齢化ということであるのですがけれども、千代田区の高齢化率は非常に低くて、全国平均よりも低いと。実は出生率も中央区、港区に次いで、23区の中でも3番目ぐらい、高いのですね。そう考えると、ご指摘のように区としてはどうなんだといったところがあると思います。

ただ、一方で、千代田区は6万8,000人まで区民の方が増えたんですけども、6万8,000人の区民だけでこのまちが成り立っているわけではなくて、来街者の方や在勤、在学の方がいる。こうした活力をもって、ご商売の方も、いろんなこのまちの産業、にぎわいが成り立っているということを考えると、人口減少とか少子高齢化によって、そもそも来街者が減るとか、あるいは

は働く方が減ること、大学に学生が通うのが減るということが、やはり通じてくるといふ面もあるかと思ひます。

ですので、事これは教育と文化に関するものでありますので、ちょっと文章としてはもう一段、こういう時代背景の中で影響は必ずあるんだけど、ご指摘のように、千代田区においてはこういう状況だということも書き添えるのはいいですかね。検討させていただきたいと思ひます。

長 崎 委 員
区 長
子 ども 部 長

はい。

はい。ありがとうございます。

よろしいですか。

作業の過程でそういった議論があつて、前回もそういうご指摘を頂いて、千代田区の特徴についての記載がすごく長くなつてしまつたんですね。書いてあることは正しいのだけど、ちょっと長過ぎてというので、そこは根こそぎビジョンに持つていって、さきほど金丸委員がおっしゃっていましたけど、大綱だけだとなかなか見えないところがあるので、それはビジョンとセットでパブリックコメントをやるつもりです。常に、示すときはビジョンと一緒に。そしてビジョンには、今、区長が申し上げたようなことは詳細を書いていきます。

大綱の中で区の特徴を書くというところは、もうこの江戸文化というところに直結している、この人と人とのつながり、支え合いというところは、もう千代田の最高の特徴だろうと。これが教育に関連する場所だろうというところで、ここだけは大綱に残してあるんですね。

なので、今申し上げた点を踏まえて、ビジョンとセットでどう見せるかというのは検討したいと思ひます。

長 崎 委 員
区 長

はい。ありがとうございます。皆さんが考えてそういう文面になっているんだつたら、特に私はこれ以上何も言うことはないです。

セットですよという形で、この組合せのもので提示したほうが分かりやすいですよ、今後。

子 ども 部 長
長 崎 委 員
子 ども 部 長

はい。そのほうが分かりやすいかと思ひています。

はい。ありがとうございます。

ちょっとそこは工夫します。

長 崎 委 員
区 長

はい。

了解しました。はい。ありがとうございます。

ほかはいかがでしょう。

どうぞ。

俣 野 委 員

はい。すみません。ありがとうございました。

これ、読ませていただいでいて、この2つ、「日本一、子育てしやすいまち」というのと、それから「心豊かな日常生活を送ることができるまち」という、この2つがすごく、響いてくるといふか、分かりやすいのかなという感じがします。

正直言つて、こういうものを出していただいでいて、読む区民の人つて本当に

限られるんだと思うんですね。その中でこの「日本一、子育てしやすいまち」と、それからこの「心豊かな日常生活を送ることができるまち」と。その中にやはり伝統とか文化とか、そういうものが入ってくるわけですから、この2つが非常に言葉としてはキャッチーでいいんじゃないのかなというふうに、私は思わせていただきました。

それと、最初の頃はコロナ禍で云々と話していたのが、それを本当に抜かしてよかったなと思いますね、こういう状況になってくるとね。そういう面では非常に私はよくできた大綱だと思っております。

区 長 はい。ありがとうございます。

ほかはよろしいですか。

どうぞ、佐藤委員。

佐藤委員 文章のことは、前向きな文章で、とても読んでいて分かりやすいし、区民としては勇気づけられるような文章で、ありがたいと思っております。

ここの文章に対して何かというのはないんですけども、ビジョンのほうの発言とかをしても大丈夫ですか。

区 長 はい。大丈夫です。

佐藤委員 子どもの心のケアというのがあるんですけども、今、千代田区、先ほどもあったように新住民が増えていて、コロナ禍の影響もあって、友達がいないとか、相談する人がいない、子どもの同級生が分からないという方が結構増えていて、誰に相談したらいいかというのが分からないという方が結構増えています。

千代田区としては、相談窓口が山のようにあって、それをきちんと探せば自分が相談するところも分かるんですけども、なかなかつらいときにその相談窓口をいろいろ探すのが難しいとなると、どこか1つ、窓口が1か所だと、そこに連絡して、それから自分の相談したいことの部署のところに行けるとありがたいので、何かホームページとかそういうところで、一目見て分かるというのが欲しいなと思いました。今後ご検討いただけるとありがたいです。

区 長 ありがとうございます。

子育て応援ガイドブックを回していただけますか。2部しかないのです。

長崎委員 私、持ってきました。

区 長 お持ちですね。じゃあ、俣野さんに。

佐藤委員 私も持っています。

区 長 ありがとうございます。おっしゃるとおり、多分66ページ、67ページがそこに当たるかなと思うんですけども、地域において、特にコロナ禍で学校や園という中で、なかなか横のつながりができないと。保護者同士であったり、特に未就学児の場合は、乳幼児の場合はご自身で、ご家庭で育てていると、横のつながりがないという課題は大きくあるかと思います。

私どもは子育て、今、お褒めの言葉も頂きましたけれども、日本一、子育てしやすいまちということで、施策を前区長のときから積み重ねてきたとこ

ろであります、一方で、積み重ねてきた結果がその冊子に詰まっていると。

ただ、この冊子を見ていただいて、窓口に皆さんご相談してくださいというのが今までだったんですけれども、ご指摘のように豊富なメニューが重なったり、多様なメニューを用意した結果、分かりづらいというのがやっぱりあるかと思えますし、66ページ、67ページのように非常に多い窓口があるということで、まず分かりやすさを、この窓口に行けばこう、じゃあ、それだったらここに繋がりますねといった形は整理していきたいなというふうに思っております。

併せて、これは妊娠期から幼稚園入園前後までに当たるんですけれども、そこについては特に、今年の夏に区独自のポータルサイトをつくる予定です。そこでは、妊娠された方は漏れなくそこに、スマホが使えない、パソコンが使えない方以外は登録いただければ、プッシュ型で通知を出します。それは児童手当とか、次世代育成の手当はどうだとか、あるいは乳幼児のワクチン接種はどうだとか、何か月健診はどうだとか、産後ケアはどうだと、一元的なそういうページを作りますし、ご自身の子どもの何歳だとか何か月だと、それに応じたタイミングでこちらから出しますので、ご自身が全部、辞書のようにそれを調べていただく必要がないようなことを考えていますし、そのポータルサイトの中で、この質問だとか相談とかも、やり取りできるようなことを考えております。

そうしたデジタルも使いながら、今頂いたようなご指摘、ご懸念のところを解消していきたいと考えております。

それでは、よろしいでしょうか。

では、これまで協議してまいりました大綱につきましては、策定までの流れについて、教育政策担当課長、説明をお願いします。

教育政策担当課長

はい。本日協議いただきました大綱（案）につきまして、これを基に教育委員会において子育て・教育ビジョンを今後検討させていただければと考えています。ビジョンの案ができましたら、その段階で、この大綱案と併せまして、区民の方々に意見を伺いますパブリックコメントを実施しまして、その後、所要の修正を行った上で策定という流れになってきます。なので、来年度、ビジョンの検討につきましては、教育委員の皆様、ご協力いただければと思いますので、よろしく願いいたします。

以上です。

区 長

はい。ありがとうございました。

それでは、説明が終わりましたので、日程の第2に、その他事項に入ります。これからは情報共有をさせていただいたり、また皆様からもご意見を頂ければと思っておりますので、まずはきっかけとして、私からお伺いしたいと思います。

区 長

先般、本区において公益社団法人日本青年会議所さんが、令和2年に始めた少子化対策に対する取組の1つであるベビーファースト宣言を発表しまし

た。今、お手元、見ていただいているかと思いますが、大綱でも書かせていただきましたように、子どもが誰一人取り残されることなく、と。将来にわたって幸福な生活を送ることができるように、本区の特色である0歳から18歳まで見通した次世代育成支援、また教育施策をさらに推進していきたいと考えています。

先日公表された厚生労働省の人口動態統計速報値では、令和4年の出生数が、ご存じのとおり前年比5.1%減の79万9,728人ということで、統計開始以来初の、初めて80万人を割ってしまったということが分かりました。全国的には、国が平成29年に公表した推計よりも10年も早いペースで少子化が進んでいるといったことで、政府、国のほうでも、異次元の対策を講ずるといったことであります。

千代田区としても、先ほど千代田区の出生数自体は何とか比較的高いところにあるんですけれども、そうはいつても、やはりこれからも継続して、さらに、安心して産み育てやすい、住み続けていただけるようなまちを実現していきたいと考えております。

具体的に、誰にどのような支援をしていくべきかと、あるいはどのような方々がどんな支援を望んでおられるのかと、この場をお借りしまして委員の皆様からもお考えを伺いたいと思っております。

そうしましたら、こちら、私から伺いたいんですが、金丸委員いかがでしょうか。

金丸委員

はい。初めて見たものですから、すみません、すぐに自分の意見を言えないんですけども、これ自身は非常にいいことだろうと思いつながら、今読みながらちょっと気になっているのは、ベビーファースト宣言だったら、主体はベビーだろうと。ベビーを主体にして文章が書かれてなきやいけないんじゃないかなと、ちょっと感じを受けました。

区長

そうですね。これは。

子ども総務課長

よろしいでしょうか。

区長

どうぞ。

子ども総務課長

この日本青年会議所の活動について、ベビーファースト運動については、名称はベビーファースト宣言とはなっていますが、子どもを産み育てたくなる社会の実現に向けというところで、赤ちゃんがファーストなんですよという意味合いではないというところで、全ての子育て施策に対しての宣言であるというところが主たる内容となっております。

子ども部長

要は子育て支援策を様々に自治体が講じて、それをほかの自治体がまねをしながら、ベビーを増やしたい、子どもを産みたくなるよなということが目的で、このベビーファーストとついているんですが、我々自治体で宣言する内容については、その先の、こんなことがあるのでぜひ子どもを産みましようというような意味合いなんです。ですので、宣言がベビーなんですけど、取組が子育てというふうになっています。

金丸委員

多分そうだろうとは思っているんですが、私があえてそういうふうにつ

た理由というのは、産んでくださいというそもそも方針自身が、ちょっとやっぱり間違っているんだろうと思うんですよ。そういうのじゃなくて、子どもを中心に考えて、子どもが生まれてもこんなに安心して育てられる行政なんですよということをアピールすることによって、子どもを産んでも大丈夫かなという気持ちになる。そういうイメージに切り替えたほうがいいのかというのが私のさっきの発言の趣旨です。

区 長

ありがとうございます。

多分思いは同じだと思っておりまして、ベビーファースト宣言という名称そのものがこの日本青年会議所さんから来たものですから、そこに乗っかっているところはあるんですが、思いとしては、子育てしやすい社会とか、そういう地域でありたいということでありまして、主体としては我々行政がそれを応援すると、施策を進めていくということですので、こうしたアクションで書かせていただいているんですけども、そうした思いも含めて取り組んでいきたいと思っております。ありがとうございます。

そうしましたら、長崎委員も、いかがでしょうか。

長 崎 委 員

はい。私も一番下の子が、今、中学生になってしまって、本当に小さいときの頃から年数がたって、私が子育てというか乳児を育てていたときよりも、大分いろいろな面で、助成があったりとか施設ができていたりとか、手厚くなっているんだろうなと思うんですけども。

ちょっとすみません、今の実情をきちんと把握できていないというところもあるんですが、子育てしやすいって、お母さんとしては社会ともつながっていたいけど、子どもはもちろんお父さんも一緒にですけど、見なくちゃいけないくて、そのジレンマって、いつの時代もついて回るのかなと思っていて、安心して預けられる保育園があるのはもちろんですけども、預けながらも子どもと過ごす時間も大切にしてほしいし、そのバランスに何かいつも親って悩んでいるんじゃないかなと思っていて。

何かどこかの自治体で、学校を休んで親と旅行に行ってもいいような、何か出ていましたよね。

区 長

ニュースが。

長 崎 委 員

はい。それが100%いいかどうかというのも、ちょっと私もまだ分からないんですけど、何かそういう機会があってもいいのかなと。それはそれぞれのご家庭の判断もあるんですけど、何か本当に、こう広くいろいろなことを考えていかないといけないのかなと思っています。でも、これって、いつの時代も正解がきっと分からなくて、子どもが育って行って、ちっちゃなときのことを思い出して、楽しかった思い出とか思い出されれば、それでいいのかなという気もするんですけど、親の時代って、もうずっとずっと悩み続けて終わるのかなという気がして、本当に難しいなど。区長からの質問というか問いかけに関して、何かこれという答えはきっと出せないなど思いながら、今日来ています。

区 長

なるほど。ありがとうございます。

私自身もまさに当事者ですから、そうだと思っけていまして、まだ小さいですからあれですけど、また中学生、高校生になってきて、どういう距離の持ち方を取るかということがあると思います。別にそれは何か価値観があったりするのではなくて、またご自身の仕事への人生というか、そういったものもあるでしょうから、その中で、ご家庭の中で決めていく、歩んでいくものだろうなというのが率直な感想です。

ただ、一方で、私もこの間、社会福祉協議会さんなどで、いろんな講座を開いていて、見に行くようにしているんですね。で、どういう質問が出ているのかなと聞いていると、講師の先生とか保健師さんとかと相談しながら、自分の塩梅を決めていくのが結構あるかなという感じがしました。今までも何か月健診で保健師さんたち方と相談すると、ちょっと落ち着くなど。それを、横の世代のママさん、パパさんとも相談してもいいんでしょうけれども。

だから、そういう相談先があるよと、講座があるよというのを、お伝えしていくことが、ご自身、ご家庭なりの答えというか、歩み方を決める上で大事なのかなと思いますし、先ほどお話しのとおり広報していきたいなと思います。

ありがとうございます。

長崎委員
区長
俣野委員

はい。ありがとうございます。よろしくお願ひします。

俣野委員、いかがでしょうか。

はい。日本青年会議所さんは40歳で定年だそうですから、ちょうど一番子育て真っ盛りで、果たして日本青年会議所に加入している男性がどれだけイクパパをやっているかどうか私は分かりませんが。私は子どもが3人おりまして、それで1人、娘がフルタイムで働いているんですよ。そうすると、まだそこは子どもがちっちゃくて、保育園に入れて。そうすると、私が見ていて本当に、何というか、髪振り乱して、あっちへ送って行って、こっちへ送って行って、自分は仕事へ行くみたいな、それが朝と夕方両方あるわけですよ。だからこれはもうどこの、フルタイムで働いているお母様方はどこでもやっぱりある問題だと思うんですけども、その辺のところを何か行政でサポートできるようなことがしていただけたらいいのかな、なんていうことを思わせていただきます。

区長
俣野委員

そうですね。

例えば1時間、2時間のことなんだけど、何かそういうのを行政でやっていただけたらありがたいんじゃないのかなというのは、ちょっと思いません。

それで、やはり私どもの世代もそうですけども、やはり男性が子育てに関わるということが、まだどのくらい浸透されているのかなというのを、それで、やっぱり職場でどのくらい認められているのかなということも思わせていただいていますけども、その辺のところも含めて、何か行政でサポートしていただけるものがあれば、ありがたいんじゃないかなというふうに思いま

区 長 す。
ありがとうございます。
1つ目の、特に本当に働きながら子育てするというのは、非常に忙しい中でのことと言うと、先ほどのウェブサイトとかポータルサイトを作りますというの、紙の書類ってすごい、お母さんだけじゃなくてお父さんも書くかもしれませんけど、申請書類って多いんですね。助成の申請だとか入園の申請だとか。そういったものが、毎回自分の名前と家の住所を書いて子どもの名前を書くというのは、そういうのを何度も書かなくていいように、ウェブサイト上でやりましょうと。

侯 野 委 員 なるほどね。
区 長 もう一度記入いただいた情報は、もう二度目以降、あるいは類似のほかの申請をするときも、もう書いていただかなくていいように、こうした効率化とか、あるいは窓口に来て申請書類を出してください、あるいは郵送して出してくださいというの、できる限りやめるような形で、ウェブ上で。

侯 野 委 員 なるほどね。
区 長 それはやっぱり20代のお母さんがやるのかお父さんがやるのか、30代、40代も、比較的スマホ、パソコンに慣れている世代だと思いますので、そういった方々にとっては非常にマッチしているだろうと、そういったことを考えて。
一方で、子の送迎とか、あるいはベビーシッターのようなこともいろいろ施策は取り組んでいまして、ベビーシッターの補助、助成制度も今充実させているところですし、あるいは朝夕のこうした送迎については、社会福祉協議会では、ファミリーサポートとあって、業者ではなく地域住民がそこに登録してボランティアとしてやっていただくので、在勤の方もおられますけれども、そうした中でうまく活用いただいて、ですからまさにほんとうに地域全体でこの子育てをお手伝いするという方がファミサポに登録されているので、その中では結構、朝夕の送迎なんかは活用いただいているように伺っています。
こうしたところで、何というんでしょうね、時間ですとか負担軽減というのは図っていきたい。これからも続けていきたいと思います。

侯 野 委 員 はい。
区 長 男性の子育てへの参加というのが、民間の企業や団体の方へなかなか私どもが言うことは難しいんですけども、1つあるとすると、やっぱり我々区役所、庁内として、子どもが生まれたと、あるいは育休に入ると。それは男性も含めて、どうやったら職場の中で喜んで迎えられるかどうかというのは、人事あり、あるいはそうした労務の関係含めて、また、戻ってきたらきちんと職員としてのキャリアを歩んでいただくといったことは、もう一段考えることが大事だなと。我々自身がそういう職場であれば、住民の方や事業者の方も見ていて、そういう区役所であれば、その波及効果もあると思いますので、それはまず役所自身で取り組みたいなど、そのように考えています。

ありがとうございます。

俣野委員

そのことは非常にいいと思いますよね。それと、先ほどのファミサポなんですけれども、これは本当にいいことだなというふうに思います。特に地域の絆が、本当に今、絆が希薄になっている中において、そういう地域のお母様OGたちがそういう形で集ってサポートしてくれるというのは、そのお母様OG同士のつながりも結構できてると思うんで、本当に地域の活性化には非常にいいんじゃないのかなと思います。

以上でございます。

区長

はい。ありがとうございます。

子ども部長

すみません。ちょっとよろしいですか。

区長

どうぞ。

子ども部長

ファミリーサポートセンターって社会福祉協議会がやっているんですけど、子ども部が社会福祉協議会に委託してやっています、子ども部の事業としてやっています。千代田の特性として、ファミサポは法に位置づけられた事業で、どこの自治体もやっているんですけども、子育て家族支援者養成という事業も別途やっています、佐藤委員はご存じだと思うんですけど、かなり講座が充実しているので、ファミサポ以上に、相当な子育ての知識をつけた方々が、感染症にかかった場合はお家に行って面倒を見たり、ちょっとした送迎などすごく柔軟に対応しているんです。そういう制度もあります。

俣野委員

ありがたいね。

子ども部長

かなりそういう部分では充実しているかなと思っていますので。

俣野委員

このちょっとしたところのつながりがね、必要みたいですよ。

子ども部長

そうですね。

俣野委員

現実の子育てをやっているお母様方に聞くとね。

子ども部長

そうですね。今回もこのスローガンに掲げたアクションの3というのが、今までは子育てに係る負担って、多分日本語として使っていなかったと思うんですよ。子育ては当たり前だろうみたいな社会だったんですけど、やっぱりこれ、素直に言うと負担感があるので、それは経済的な負担なのか、心理的な負担なのか、この2点はずっとやっているんですね。手当を充実したり、あと心理的なものについては相談を充実したりということで、その2つはやっているんですけど、やっぱり労力的な負担というのがちょっと新しい視点かなと千代田区で思っています、区長がさきほど申し上げたポータルサイトですとか、保育園なんかもおむつのサブスクって、昔はおむつを持ち帰るのは当たり前でしょ、みたいなのがあったんですけど、いや、もうそういう時代じゃないんじゃないかなというので、少しでもこういうふうに負担感を軽減していく労力的なところを、ちょっと着目して進めていきたい。多分このアクションの3番目というのは結構画期的なところだと思うんです。

俣野委員

いいですね、これね。

区長

はい。ありがとうございます。

佐藤委員

そうしましたら、佐藤委員も、いかがでしょうか。

はい。安心して産み育てたいまちということで、夫婦2人だけで育てるのではなくて、やっぱり身内や行政や、先ほどのファミサポとかの子育て支援者がいることが、安心して産み育てるためには、その方たちの協力が必要だと思います。

あと、住みたいまちと住み続けたいまちというのはまた別で、住みたいまちは、交通の利便性がいいとか、あと大型施設があつたりで、ハード面が充実していることだと思います。一方、住み続けたいまちというのは、そこに住んでいる住民がそのまちが好きでないといけなかなということと、あと人目を気にせずに自由な生活ができるというソフト面の充実があると、住み続けたいまちになるかと思います。

区の子育て支援は、先ほどもいろいろ説明していただいていますけど、とても充実していますけど、それだけでは子育てが終わったら区外に引っ越ししてしまい、住み続ける人が減ってしまうと思います。程よい距離で周りの人とつながっている環境や、困ったときやつらいときに相談できて孤立させないための心の支援、そして住んでいる地域を好きになってもらうことが必要だと思います。町会に入ったり、サークルやPTAやママ友など、仲間づくりや居場所づくりができると、まちが好きになってくるのではないのでしょうか。

あと、住み続けたくても、千代田区は家賃が高くて、どうしても区外に出ることになってしまいます。せめて家賃補助が子どもの義務教育の終了時まで続くとか、所得制限のラインが今低いということで、もう少し高くなったり、西神田住宅のような区民住宅が増えるなど、子どもが近くに住めて孫の世話や大人の世話を身内ができる環境があればいいかなと。それが理想です。

そのほかに、孤立を防ぐための心の支援として、区立の児童館の拡充が必要だと思います。区立児童館は先生方が区内で異動するので、顔ぶれも変わらず、何年かすると、自分たちがなれ親しんだ先生が戻ってくるということがよくあります。子どもたちは生まれてから、下の子は生まれる前から児童館にお世話になっています。一時保育で先生と毎日のように1対1で過ごす子どももいて、大きくなっても、知っている先生がいてくださることで、子どもも親も安心して児童館で過ごすことができます。見ていると、1人でふらっとやってくる中学生も結構多く見かけます。ただ、ここ最近子どもも増えていて、下駄箱やロッカーや部屋や職員が不足してきたりしているのも見えています。

あと施設の拡充も欲しいところですが、親や子どもが遊びながら、さりげなく職員に相談することも多く見かけられるので、職員がカウンセリングの勉強をしたり、カウンセラーを定期的に派遣したり、気軽に相談できる場所として児童館を充実させてほしいです。一方、児童館に行かない方もいるので、そういう人のための相談先として、先ほどの区長さんのおっしゃってい

た相談先の一元化が早くできると、うれしいと思います。

あと、相談窓口がほとんど電話になっているんですけども、やっぱりつらいときとか、本当につらいときって、口から自分のつらいことを言葉にして出すと本当につらくなってしまうので、今、LINEとかメールとか、ほかのツールもあればありがたいと思います。

また、先ほどから出ているファミサポとか子育て支援者なんですけど、地域の方たちが自分の好意的にボランティアでやってくれているんですね。ただ、それをなかなか知らせることがなくて、依頼する側は、あ、アルバイトでやっているのねと思っている方も中にはいらっしゃって、ちょっと違うんじゃないということもあるので、そこのところを、やっぱり区民の人が好意でやっているということを利用者の方に知っていただいて、感謝する気持ちを忘れないでいてほしいなと思っています。

以上です。

区 長

はい。ありがとうございます。

まず、ハード面、確かにそうかなと。住みたいということと、いざ住み続けたいというのは、また違うと。ご指摘のとおりだと思います。特に住みたいまちとなると、きっとイメージとしては、区外からこのまちに住んでみたいということだと思いますし、そうした中では、前区長のときからそのサポート、支援を充実させてきた結果、子育てについては千代田区は進んでいるという評価も頂いていることだと思いますし、また、大型の商業施設もないし、あるいは大きな河川敷だったり公園だったりとかもなかなかない中では、千代田区としては、大型の施設をつくる際には、そうした生活利便施設を造ってくださいというようなまちづくりも、この間誘導はしていますし、あるいは再開発を機にそうした空地进行を造っていただいたり、公園に類するような、みんなが集える広場を造ったり、そこではきっと、公園になるとなかなかキャッチボールができなかったりと制限がかかってしまうものですから、そうしたものがないような形で、やはり都心においてこの豊かな暮らしだったり豊かな子育てができるというのは、鋭意これからも取り組んでいきたいと思っています。

そうしたハード面の話とともに、いざ住み続けたいといったことは、なるほどと思いましたがけれども、やっぱりサークルでも町会でも、コミュニティがあると、このまちは住み心地がいいよねと、しやすいよねという、このまきに家族も含めたこうした居場所があるまちというのはとてもいいことだと思いますし、そうしたコミュニティの関係で、どうやって入っていきやすいものにするかというのは、我々自身が入ってくださいというのは難しいんですけれども、町会が、外から見たら敷居が高く見られているとしたら、実は敷居は高くないんですよという形で、既存のコミュニティ、サークルでも趣味の活動でも、入っていただきやすいような仕掛けやきっかけは、これからもぜひ取り組みたいと思います。

一方で、この家賃ということは、私も周りからも聞いているものでは

ら、そうした要望が高いという認識はある一方で、これまでは、20年ぶりに基本構想を、ビジョンを改定したんですけれども、これまでは5万人を目指しますと。人口減少していたものですから、むしろ人口を増やすために、常住人口ですね、都心に戻ってきてくださいということでの、家賃補助とか、あるいは区営の住宅も造ってきた中で、一方で、殊この10年は、人口が増えている中での住まいの在り方というのは、なかなか今お答えするのは難しいかなというところはありますが、課題としてこの家賃があるということは認識しております。

この3つ目を頂きましたけれども、児童館ですとか、そうした、また気軽に行けるような、これも居場所の1つかと思いますけれども、お子さんたちの場所といったことも、今、拡充は必要だと。地域によっては児童館がない、ちょっと遠くに行かなきゃいけない地域もありますから、そうしたところも拡充していきたいと思えますし、ツールのお話も頂きました。LINEですとか、全部電話ということではなくて、メールだとまた送ってという形になりますから、ちょっとハードルはあるんでしょうけれども、そうした双方向性で、チャットのような取組はぜひ検討したいと思っています。

最後に、ご指摘のとおり、ファミサポはやはり好意で成り立っている。地域住民や、それは昼間区民も昼間の区民さんも含めて、好意でやっていただいているものだというのは、これからも伝えていきたいですし、もしそうした、本当に事業としてサービスとして提供してほしいというのであれば、やはりそうしたご家族、ご家庭には民間の事業者を使っていただく。じゃあ、民間じゃなくてファミサポを使っていただく意味は何だろうというのは、利用される際にはぜひお伝えしていきたいなど、そのように思います。

ありがとうございます。

じゃあ、皆様から伺いましたので、ほかに何か意見交換ですとか情報共有などはありますでしょうか。

どうぞ。

長 崎 委 員

はい。ポータルサイトをすごく楽しみというか、本当に今の世代にはすごくマッチしているんじゃないかなと思っていて。いつも思っていたのが、予防接種のために同じ質問を書いて、出生時の体重とかを書くために母子手帳を。

区 長
長 崎 委 員

同感です。

読み直してとかあったので、そういうのが、本当に一度記入すれば上がってくるとか、何か変更がある部分だけ入力できるとか、そういうのがあると、すごくいいなと思っていて。

今もしかしたら変わっているかもしれないんですけど、母子手帳も日付とかはスタンプ印で押してあって、それがか擦れていたりにじんでいたりして、これは何月何日なんだろうとかって結構あるんですよ。そういうところがクリアになるとか。あと学校も、年度の初めにかなりの書類を書かなくちゃいけないくて、きょうだいが多くなってくると、何人分とか同じような内

容を毎年書き直したりとか、通学路の地図を描いたりとか、そういうのも、1回入力すれば、変更があるときにだけ書けばいいというような何か仕組みができれば、年度初め、すごく楽になるなと思います。

区 長 よく分かります。ありがとうございます。

ポータルサイトって広報しているものですから、期待値が今上がっているような感じで、私もまだ中身を見ていないので。

長 崎 委 員 少しずつでも、こうね、できる機能が増えていったらうれしいなと思います。

区 長 そうですね。リリースする前に実際の当事者の皆さんにも見ていただきながら、ユーザーの使い心地とかも含めて、見やすさも含めて、そうした声を反映できるようにしていきたいと思います。ありがとうございます。

どうぞ。

俣 野 委 員 今、国でも異次元の子育て支援ということを行っていますけども、今日新聞を見ていたら奨学金のことが出ていたんです。その奨学金というのは返済不要の渡し切りの奨学金ということで、やはり子どもを持つと、教育費にかかるというのは、やっぱり今の時代、本当に大きな1つの課題だと思うので、その辺が、足立区さんかな、どこかでやっていたのが、20人のところ約200人ぐらい応募が来たという話で、それは渡し切りの奨学金ということなんです。これは大学なんだと思いますけども、何かそういう、当区の場合もそういう渡し切りの奨学金、私は例えば給食の無償化よりはもっと意味があると思うんですよね、そういう形で必要な人にそういう形で奨学金を支給するというのは。もちろん選考のいろいろな過程もあるでしょうけども、何かそんなようなことがもしあればいいな、ということをおっしゃっていただきました。

区 長 ありがとうございます。

本当に国もそうなんでしょうけど、じゃあ、これが何に効くのかというのが、多分正解はなくて、全てやるということだと思います。総花的かもしれないけれども、部長も申し上げたように、経済的な支援もそうだし、心理的な軽減もそうだし、労力とか時間もやっぱりさっきのお話のとおり使うわけですから、そういったものを総合的にもう軽減して、あらゆる施策を打った上で、じゃあ、結果どうなってくるかといったことだと思います。多分そういうふうにやってくると、地域の、あるいは社会から見守る温度も上がってくる、温かくなってくるので、そうした中で結果的になるんだろうと。その1つが、おっしゃるとおり教育費もそうだと思います。

一方で、当区の場合は、やはり、基礎自治体の立場ですから、未就学から中学まではやはり公教育がありますので、九段中等は高校生相当までやりますから、我々としては、まずそこの公の教育、あるいは保育の質を上げることが、まず教育費の負担軽減にはなるかなと。つまり私立へ行く方も多いですけども、私立の園に行くよりはやっぱりこっちのほうがいいねと思ってもらえるようなところを磨き上げることが、まずその負担軽減に直結する

かなと思います。

つまり私立へ行った方の負担を軽減する、経済的な負担を軽減するというよりも、お住まいの地域の園だとか公立学校がすてきですよといったところを、教育委員会の下これから磨き上げるということもありますし、あと既に都立高、都立大学とこの学費の面では、この免除という言葉も示唆されていますので、公教育がしっかり大学までつながっていくと、いいのかなというふうに思います。

公教育じゃなくて、やはり私立のこういったところがいいなと思うご家庭は、もちろんそういう形で進んでいかれると思いますけれども、そうした中で、基礎自治体としてできる、この見えている範囲の中での磨き上げであり、支援をしていきたいと考えています。

俣野委員
区長
金丸委員
区長
金丸委員

分かりました。

ありがとうございます。

よろしいですか。

はい。

このアクション1、2、3を見ていて、裏側が何かということ考えたときに、多分先ほど俣野委員が言ったように、また佐藤委員が言ったように、住み続けられるという、その根底は何かといったら、仲間がいるということなんですね。その仲間をつくるための施策なんだというところを忘れないでやったほうがいいと思うんですね。

うちの子どもなんかも、小学校のときの仲間はいまだに付き合っているわけです。そういうのがきっちりその仲間として残っていれば、外に出た人もまた千代田区に入りたいという気持ちもなってくるし、やっぱりそこが一番重要なのかなという感じがします。

こんなことを言うとすごく語弊があるんですけども、例えば大学の学費の奨学金、私のところは実は大体100人ぐらい給付の奨学金を出しているんですけども、それはそれで意味があるんですけど、千代田区に住んでいらっしゃる方って、家賃がすごく高いのに住めるって、大体は共稼ぎで両方ともかなりの収入があるわけです。その人たちに対しての負担額としては、果たして大学に入る費用なのかなと思ったときに、そのお金をもう少し有効に使えるものがあるんじゃないかなということも、検討する必要があるような気がいたします。

区長
金丸委員

後半のほうのお話は、何でした、奨学金が。

奨学金に例えば区がお金を出すというふうに考えるときがもしあるとすると、それで来ると、その奨学金に使うのがいいのか、それとももっと有効的なものがあるのかということの本気で考えないと、要するに区の特長から考えると、例えばほかの周辺の区の家庭が、ものすごく給料が下がっていて、貸与の奨学金を借りないに住めないというような人たちが、40歳代半ばぐらいまで払っていかなくやいけない状況がある。それを救わなくやいけないのかというのは、ひょっとしたら違うのではないかと、そういう趣

区 長

旨でございます。

分かりました。後段のほうは、おっしゃるとおり、それぞれの地域性というか、区ごとの、区市町村ごとの事情があるでしょうから、そういう中での判断になると思っています。

前段のところも、裏にあるのは何だろうというのは、本当に仲間づくりですし、そうした人がいるまちだと、一度出てもまた戻ってくるということはあるわけですし、また、その居場所が、学校なんかはまさにそうだと思いますけども、母校があると。あのときお世話になった先生だったり、あるいは同窓生だったりということを、まず堀米教育長は、今、千代田区でご尽力いただいていますけど、当時のあの店はどうかとか、当時の方が今消防団にいたりとか、そういったことは絆として残っていくと思いますので、行政がどういう形でそれを提供できるかはあると思うんです。それぞれでつくっていただくものですから、そういったものをうまく見守りながら、支えられるような仕掛けをしていきたいと思っています。ありがとうございます。

金丸委員
区 長

お願いします。よろしくどうぞ。

はい。では、よろしいでしょうか。

それでは、これをもちまして本日の総合教育会議は閉会とさせていただきます。ありがとうございます。